山形大学附属博物館報23

THE MUSEUM OF YAMAGATA UNIVERSITY　1997. 3

目　次

ユニバーシティ・ミュージアムを目指して……伊藤健雄（1）
小嶋家文書と附属博物館　—受入の経緯と保存・整理—……岩田浩太郎（2）
資料紹介　—2枚羽木製プロペラ—……（4）
平成8年度事業報告……（5）

ユニバーシティ・ミュージアムを目指して

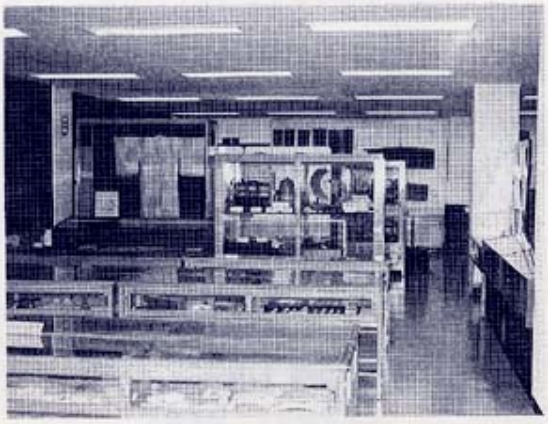
館長　伊藤健雄

1月中旬の地元紙に掲載されたコラム欄を読み，思わず苦笑してしまった。記事は「大英図書館が引っ越し」というタイトルで，19世紀半ばに誕生した世界有数の大図書館である大英図書館が，このほど，北に1キロほど離れた新図書館に移転を開始したというものであった。これだけでは別にどうということのない記事であるが，実は，大英図書館は，これまで大英博物館の一部に間借りしていて，非能率的なことで悪名高かったというのであった。博物館が大家，図書館が店子である。

これに比べて本学では，大家と店子が逆転している。本学の附属博物館は附属図書館の3階に間借りしていて（本当は“間借り”ではなく，独自の専有面積を占めているのだが），何かと不自由な思いをしながらも，なかなか独立した建物をもてないでいる。こんな状況を思い浮かべ，つい苦笑してしまったというわけである。

本学附属博物館の歴史や概要については，前号（館報22号）で紹介した。収蔵されている資料は歴史・古文書関係から自然史・芸術関係まで6万点余に達しているが，これを収める展示室や収蔵庫はいかにも狭い。また，資料の研究保存を専門に担当する専任教員や，管理運営に当たる専任事務官は1人もいない。運営予算もその8割以上は人件費に当てられている。これで博物館と言えるのだろうか。

1月末，同じ地元紙に「山大附属博物館ご存じですか」という記事が載った。一級の収蔵品を備えた“知の宝庫”でありながら，知名度はいま一つ，せっかくの収蔵品が十分に活用されていないという内容の記事である。学外の利用者には“常連組”が多く，知る人ぞ知る存在ではあるが，知らない人は，学内の教職員や学生にも少なくない



と指摘している。博物館を預かる者にとっては，いささか耳の痛い記事であった。

現在，我が国では，博物館を設置している国立大学は極めてわずかしかない。アメリカの794館（1158大学中），イギリスの126館（117大学中）に比べると誠に寂しい限りである。このような状況を考慮してか，一昨年，文部省は学術審議会の答申を受け，遅まきながら各大学の設置要求に対応する方針を打ち出した。いわゆる「ユニバーシティ・ミュージアム設置構想」である。

大学には数多くの学術標本が収集保存されているが，そのほとんどは研究室の片隅に積み重ねられ，個々の研究者の責任において管理されている。整理が未完成で，研究対象としての一次資料になり得ていないため，部外者の活用はほとんど不可能な状態にあるものと思われる。学術研究の目的で集められた標本は，研究者個人の私有物ではない。それは，研究教育の資源として多面的に活用されるべきものであり，「学術情報の発信・受信基地」としての機能を有する博物館において，総合的に管理されるべきものである。博物館では，これらの標本を対象とした組織的な研究や，教育現場での活用を推し進め，加えて「社会に開かれた大学」の窓口としての展示や講演会等を通じて，標本の有効利用を図り，大学における研究教育の成果を地域社会に積極的に還元すべきである。

活動の中核となる職員体制としては，学術標本の研究者としての専任教員と，整理・保存・公開などの業務に携わる専従職員の配置は不可欠である。さらに，客員研究者やボランティアを活用する制度も必要であろう。

ユニバーシティ・ミュージアムとは，まさにこのような機能を有する施設であり，講義室での授業では得られない“学問の感覚を研ぎ澄まし，直接肌で吸収する”施設である。残念ながら，現在の附属博物館は，その足元にも達していない。学内外のご理解とご協力を得て，ユニバーシティ・ミュージアム設置を目指して進んで行きたい。

（教育学部　教授）

小嶋家文書と附属博物館

—受入の経緯と保存・整理—

岩　田　浩太郎

1

このたび，山形市三日町の小嶋家（小嶋源兵衛家，現当主小嶋伊三郎氏）より，同家の古文書・資史料が山形大学附属博物館へ寄贈された。小嶋家は，商業をはじめ山形の実業界で現在ひろく活躍している小嶋家一族の本家である。

寄贈された古文書・資史料からあきらかになりつつあることを述べれば，小嶋源兵衛家は天保期（1830年代）に銀町の小嶋源右衛門家（宗家）から分家し三日町に居を移して店を開き，山形城下町の中規模商人（荒物・煙草など萬商い）として成長していった。遠く奥州伊達郡（現福島県北部）へも萬商品を売り捌き，幕末には油商売にも参画，維新後明治期には主要輸出品目となった茶（茶栽培・製茶）・生糸（桑栽培・繭・蚕種）を取扱い，貸付業をともないながら地主としても成長していった。また明治中期以降は国内外の米穀販売を積極的に手掛け，さらに戦時統制経済期には肥料・飼料会社を経営し，戦後に至っている。昭和戦前期には山形米穀商業組合長や山形商工会議所議員を歴任し，山形商業界の中心的存在であった。同家は小嶋奨学基金の設立などの社会的貢献でも知られている。同家の古文書・資史料の中心は経営帳簿・商用書簡類であり，江戸時代末期から戦後に至る山形商業の展開の具体相をあきらかにする上で誠に貴重なものである。

この小稿では，後年のために，小嶋家文書の受入の経緯および附属博物館における保存・整理の経過についてやや詳細に記録することとしたい。

2

1996年7月に小嶋伊三郎氏より山形大学人文学部教授板垣哲夫氏に，蔵の改修にともない内部から古文書・資史料が出てきたので，その引き取り方の依頼があった。板垣氏より岩田に協力の依頼があり，7月27日に板垣夫妻・岩田が三日町の小嶋家を訪問，史料の存在状況の確認をおこなう。すでに蔵から古文書・資史料群は前庭に運び出されており，それまでの保管の原秩序は確認できな

かった。一部が雨曝しになっていたので蔵の内部および庇下に一時保管する。また8月6日に岩田が史料所在の2次調査を実施し，前庭の廃材の下の箱から資史料をさらに確認，伊三郎氏のご協力を得て資史料の一時保管をした。

7月29日より小嶋家文書の意義とその受入・保管の緊急性を山形大学附属博物館および附属図書館に説明。山形大学附属博物館員の高橋加津美・山本敦子両氏が博物館への受入に積極的な意向を示された。そして，伊藤健雄附属博物館長が受入を決断され，保管場所の提供などの協力方を附属図書館へ要請された。8月7日に板垣・高橋・山本・岩田の4名で小嶋家文書の附属博物館への搬入をおこなう（暑い夏の日であった！高橋氏のワゴンで6回往復）。搬入した総量は，古文書・資史料は大小26箱分，鎧2箱，漆器一式1箱，看板2枚，井戸桶・脱穀棒各1，である。附属図書館3階人文学部境の部屋（渡り廊下部分。施錠可能で室温も高くならない部屋）を整理期間中の仮保管場所とすることに決定し，図書館情報管理課職員の方々および附属博物館出入りの学生諸君の協力も得て，古文書・資史料・道具類を搬入・保管した。

古文書が出てきた蔵(右側)
1996年8月7日　小嶋家にて板垣氏撮影。

8月13日に伊藤館長・岩田が小嶋家を訪問し，搬入の状況報告と謝辞を述べる。伊三郎氏より古文書・資史料・道具類の附属博物館への寄贈のご意志が表明され，合意した。そして，9月5日の運営委員会で，附属博物館として正式に小嶋家文書を受入れ，整理・保存していくことを決定した。

8月9日より，晴れた日に小嶋家文書の曝書（ばくしょ）作業をおこなった。古文書の保存状態は概ね良好であったが，一部に濡れや汚損（鼠の糞尿や喰いちぎり）が激しく，多種のカビの発生や虫の卵の付着，形状の変形や紙の成分の分解による凝固化（帳面や合綴の全体が固まってしまって一枚一枚めくれない状態）が進行しているものが確認された。そのため，応急措置について国立史料館に問い合わせ，検討をおこなった。水分の除去については，真空凍結乾燥法などの保存技術が現在発達してきているが，予算面や協力機関の有無などの問題があり，夏場のカビの繁殖しやすい状況下にあるという緊急性から，曝書による措置が適当であろうとの意見を得た。

そのため，まず8月9日～11日に，カビの発生や卵の付着・濡れ・変形の著しい古文書22点について，くっついている帳面を可能な範囲で一枚一枚開いていく作業および曝書を岩田がおこなった。続いて8月12日以降10月30日まで附属図書館の屋上（附属博物館の真上）で，小嶋家文書の全てを対象に，順次，曝書作業を高橋・山本・岩田の3名でおこなった（通常9～16時，通算30日間）。古文書群の搬入が緊急におこなわれ，曝書が附属博物館業務として予定されていなかったこともあり，通常の業務（来館者への応対，公開講座や特別展の準備・開催など）に支障がない日を選んで実施した。風で一部の資料が遠くへ飛ばされたり，急に曇天・夕立となり急いで取り入れるなどの苦労もあった。通報してくれた附属図書館員の方々や取り入れるのを手伝ってくれた博物館出入りの学生諸君に感謝したい。濡れを干し上げる点では効果があったと考えられるが，カビやホコリの完全な除去は難しく，また凝固化している帳面の保存法や閲覧・公開を可能にしていくための措置，保管場所など，まだまだ検討すべき課題を多数抱えているのが現状である。

図書館屋上での曝書風景
1996年10月17日　筆者撮影。

3

高橋・山本両氏の積極的な意見により，今年度予算で刊行する『古文書史料目録』で小嶋家文書を扱うことに決定した。目録は予算面から頁数に制約があり，膨大な小嶋家文書の全部の目録を一挙に掲載することができない。また，目録カード取りのための予算も僅少であるため（年間10日間の雇用費に限定されている），小嶋家文書全体の目録カード取りを今年度中に完了し，その全貌を明確に把握し整理した上で，数冊におよぶであろう小嶋家文書目録発行の全体計画を練るという余裕のある手続きを踏むこともできないのが現状である。そのため，こうした制約のなかで第一分冊ではどの部分を対象にするのが現実的なのか，を高橋・山本・岩田の３名で話し合った。江戸時代の古文書というように時期を限定して目録化するプランと，主要帳簿・冊子類（竪帳・横帳など）というように古文書・資史料の機能ないし形態から限定をおこない目録化するプランとを比較検討した。その結果，時間的予算的な現実性から後者のプランを採用することに決めた。さらに，小嶋家文書の帳簿類を時系列的に検討すると，幕末期に整備された帳簿の組織が加除修正をともないながらも明治末～大正期まで概ね継承されていくことがあきらかとなったので，主要帳簿・冊子のなかでも天保期～大正期までのものに今回は限定し（約700点），昭和戦前期～戦後期の帳簿・冊子類は第二分冊以降で扱うことにした。

12月９日～１月16日までの間の10日間（通算80時間），例年お願いしている須崎寛二氏に依頼し，主要帳簿・冊子の目録カード取りの作業を実施した。目録分類法については，古文書・資史料の原秩序や組織体系を充分にふまえた目録作成の方法が近年提唱・実践されつつあるので，その成果をふまえた再検討が必要であると私は考えているが，現状では余裕がなく従来からの方式を踏襲することとなった。ただし，従来『古文書近世史料目録』と題していたが，近世を削除し『古文書史料目録』と改称することにした。その方が明治期を中心とする小嶋家文書の内容にも即し，また近世文書ばかりでなく近代文書などの増加が予想される今後の古文書・資史料の収集・目録化にあたって幅広く対応できると判断したからである。現在，山本氏の担当で目録原稿の整理が鋭意進められている。

4

先日，寄贈者の小嶋伊三郎氏より小嶋家親和会の総会・新年会（1997年１月３日）で小嶋家文書を研究した成果を話してほしいとの依頼があり，岩田が「糸小嶋家文書について―創業期，小嶋家の商業経営―」と題して報告をおこなった。

その際にも意義づけをおこなったが，小嶋家は，山形城下町の大商人（紅花を基軸とした上方との交易商人）から銀行資本家へと発展していった長谷川家や三浦家とは異なり，中堅の城下町商人（仲買・萬商い）から出発し近代においても専ら商業資本家として活躍し山形商業界の中心へと成長していった家であり，山形商業史上一つの典型的存在として位置づけられる。その意味で小嶋家文書は，江戸時代後期～近代の山形商業の転換および展開の具体相を解明する上で極めて貴重な経営史料群であるといえる。

また，これまで山形大学附属図書館および博物館で所蔵されてきた古文書・資史料は地主文書が中心であり（三浦文庫もその内容は地方各地からの収集文書が中心である），山形城下町商人文書・近代山形商業経営史料は欠けていた。この意味でも，小嶋家文書は本学をはじめ地域の方々の研究・教育上，意義のあるコレクションとなると考える。

附属博物館は予算・人員・保管スペースにおいて弱小であり，これまで述べてきた小嶋家文書をはじめ古文書・資史料の保存・閲覧体制の充実のために様々な問題を抱えている。附属博物館をはじめ関係各位・諸部局の一層のご理解とご協力を願ってやまない。

最後に末筆ながら，貴重な古文書・資史料を寄贈され，小嶋家文書の分析にご協力くだされている小嶋伊三郎氏に深く感謝申し上げたい。

（人文学部　助教授
附属博物館運営委員）

資料紹介

２枚羽木製プロペラ

写真の資料は，大正15年10月に日本楽器製造㈱（現在のヤマハ）によって製作された，２枚羽木製固定ピッチプロペラです。全長は294㎝，中心部（ハブ）の直径は24.5㎝，くるみ材を11枚重ね合

わせて接着した合板で，表面は漆塗りです。２枚羽根の前縁には，それぞれ磨耗や損傷を防ぐための包装金具（チッピング）が取りつけられています。こうしたプロペラの中には，更に保護のため羽根の表面を羽布などで包んだり，先端部へ穴を開けて湿気を逃がすようにしたものもありますが，この資料は未使用のものと思われ，そうした痕跡はありません。

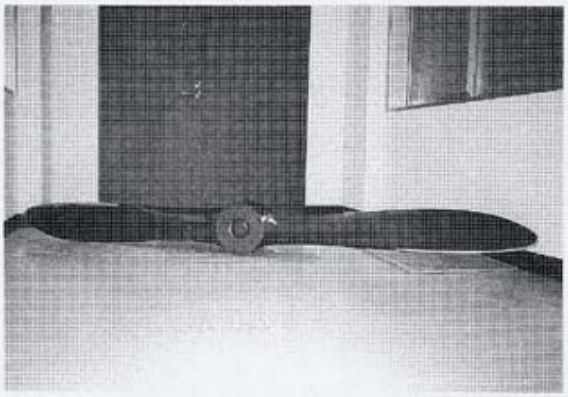
ライト兄弟が初飛行に成功した1903年（明治36）からわずか20年余りの当時，第一次世界大戦によって航空機とその技術は飛躍的な進歩を遂げてきており，日本はそれらを欧米から輸入し，模倣することに懸命でした。陸軍と海軍は互いに競って開発を進め，また大正の後半からは民間会社の航空機開発がそれに加わって，一層の活発化を促していきます。日本楽器は楽器製造での木材加工技術を活かし，大正10年から陸軍の発注を受け木製プロペラの製造も行っていました。大正15年の４～８月にかけて，日本楽器では大規模な労働争議が起こっており，この資料はその争乱がようやく終息した時期の製品とみることができます。

プロペラ中心部側面の銘から，対応する使用エンジンはロレ式400馬力，使用機種は丁式二型であったことがわかっています。ロレ式（ロレーン式）とは，当時，飛行機がレシプロ・エンジン（ピストン・エンジン）だった時代の，フランス製ロレーン発動機のことで，これは水冷式Ｖ型12気筒でした。また丁式二型は，フランスの主力旅客機ファルマンＦ60ゴリアートを，大正10年に爆撃機用に設計し直して陸軍で購入した，大型爆撃機の制式名に当たります。初期型はサルムソン式230馬力でしたが，後になってロレーン式400馬力が採用されました。

時代が昭和に至ると，多くは木と金属の合成だったそれまでの機体が全金属製へ，木製だったプロペラも次第に，ジュラルミン等の金属プロペラへと移行していきます。羽根の付け根は固定ピッチだったものから，動いて角度を変えられる調整ピッチ・可変ピッチへと。エンジンの性能もますます上がっていき，丁式二型のような飛行機は旧型として，昭和３年頃には廃されていきました。

このプロペラは㈱横河電機製作所を経由し，昭和初期に寄贈者鈴木信氏の父君の手に渡って，山形へと辿り着きます。航空計器開発に着手していた横河電機は，東京小金井に陸海軍の指定工場を持ち，試検用に練習機なども購入していました。

そして山形は，東北で唯一木製プロペラを製作し（原田製作所　現ハッピー工業㈱），また日本飛行機㈱山形製作所で海軍の九三式中間練習機（通称赤トンボ）を製作しており，太平洋戦争末期にはロケットエンジンの局地戦闘機「秋水（しゅうすい）」も造っているなど，あまり知られてはいませんが航空機と関わりの深い土地柄です。数奇な経緯を経て，はからずも当館へ辿り着いたこの木製プロペラは，往時の航空技術とその苦難の歴史と，それに関わった人々の変遷を，物言わず語りかけてきてくれています。　　（附属博物館　山本敦子）



平成８年度事業報告

平成８年度に本館で実施した博物館実習の参加人数は次のとおりです。

	人文学部	理学部	教育学部	計
１回目 7.29～8.1	人 21	人 8	人 12	人 41
２回目 8.26～8.29	8	6	9	23
３回目 9.24～9.27	14	7	3	24
計	43	21	24	88

今年度は実習中の他館見学に，初めて山形県郷土館「文翔館」を取り入れましたが，以前から継続して見学にうかがっている山形県立博物館と共に，実習生からは多くの建設的な感想が寄せられました。奇しくも両館では，ボランティアガイド制を導入しており，その在り方や位置付け，効果，また，普段は見ることのできない収蔵庫の見学等，本館の実務的な実習だけでは得ることのできない現場の状況を肌で感じることができ，有意義な実習となったようです。

公開講座は「山形の地場産業と技術の流れ」のテーマで開催され，多彩な講師陣による郷土の産業や技術を支えた人々の努力や工夫の講義が，受講者から好評を博しました。

講師及び講義科目は次のとおりです。

講師及び講義科目

回・月日	講義科目	時間	講師
第1回 10月5日	ベビーロックの誕生について	90分	㈱鈴木製作所 柚山幸介
	産業の父ワットの奮戦と辛苦	90	山形大学助教授 横山孝男
第2回 10月12日	山形の家具産業と技術の流れ	90	㈱天童木工 大山勝太郎
	鋳物業の成立と機械工業のかかわり	90	ソフト山形研究所 槇　昭一
第3回 10月19日	新庄東山焼き155年と地場産業の変遷	90	新庄東山焼 涌井弥瓶
	明治・大正期の米沢織物	90	米沢市史編纂室 小山内誠永次
第4回 10月26日	ロケット戦闘機「秋水」について—山形の先導技術—	90	FA山形 寺岡　嵩
	米沢織の歴史と伝統	90	山形大学名誉教授 横山昭男

なお，特別展も公開講座と連動して，同じテーマで11月11日から22日まで開催され，山形打刃物協同組合，山形仏壇商工業協同組合等の協力により，見学者に地場産業の実際の資料を見ていただくことができました。

（附属博物館　高橋加津美）

平成7年度見学者総数

一般成人	個人	212 人
	団体	135
大学生	個人	1,402
	団体	69
児童・生徒	個人	16
	団体	120
合計	個人	1,630
	団体	324
	総数	1,954

編集後記

平成7年6月1日に新装開館した本館も，開館から約1年8カ月が経ち，毎月の入館者総数のうち，大学生が飛躍的に伸びています。これは事務室で手続きをとって入館・見学というシステムをとっていた以前と違い，学生閲覧室から直接館内に入館できるようになったことが理由と思われます。その分，博物館へ入館するための独立した通路がなくなり，図書館内を通って入館せざるを得なくなりました。学外からの一般の入館者が減少気味なのはそれが原因であることは否めません。この二つの事実を踏まえ，両方のバランスをとりながら，博物館の存在を多くの方々に知らしめていくことが，今後の課題となっていくことでしょう。

山形大学附属博物館報　№23　1997．3 発行
編集兼発行人　山形大学附属博物館
（〒990）山形市小白川町一丁目4－12
（TEL）0236－28－4930（直通）